

語用論の視点から見た日本語の主題の非省略

曾 儀 婷

1. はじめに

本稿の目的は、主題としての「私は」の非省略に関する一般的な解釈に対し、語用論の観点から、新しい解釈を提示することにある。

従来の主題研究において、頻繁に主張されてきたことは、日本語の会話および文章において、主題は省略され易いものの、話題が変わった時には主題は省略されず、むしろ使用される、ということである(寺倉(1986)、砂川(1990)、雨宮・林部(1993)、三上(1960))。というのも、例えば、談話の焦点が主題にある時に、話題(トピック)が話し手と聞き手で共有されている必要があり、もし新しいトピックに変換する場合、話し手は聞き手にトピックが変換したことを知らせ、聞き手と新しいトピックを共有しなければならない。そのためにも、主題を明示する必要があるのである(雨宮・林部:1993、甲斐:1995、神崎:1994)。

しかしながら、話題が完全に変換していなくても、主題が使用される場合がある。本文で詳述するが、筆者は、話題(トピック)には重層性があると考えており、単に話題が転換したかどうかで日本語母語話者が主題を省略するかどうかを判断していないと主張したい。例えば、主題の省略・非省略に関して、いわゆるグレーゾーンが存在する。つまり、省略してもいいし、省略しなくてもよい場合が存在する。詳細は本文で触れるが、この点に関して砂川(1990)は、省略するか否かは書き手の自由な判断であると述べている。本稿では、この点に関し、砂川(1990)の意見に同意するが、実は、トピックの重層性に着目した時、主題が省略されるかどうかは、書き手の自由な判断で決められる以外、他の要素が存在しているのではないかと筆者が思っている。本稿は、主題研究において、これまで欠けていた部分を補完できる内容を持っていると思われる。

最後に二点断っておきたい。まず、主題研究において、省略と非省略の両方の研究が存在する。前者は、なぜ主題が省略されたかを研究するものであり、後者は、なぜ主題が省略されなかったのかを研究するものである。本来は両者総合した研究がなされるべきであろうが、現在、省略か非省略かに焦点を絞って主題研究が進められている。本稿は、主題の非省略を研究対象としたい。それは非省略に関する研究の蓄積が、省略のそれに比して少ないということが理由である。また、非省略に関する研究は、二つに分けられる。すな

わち、「使用すべきで、使用しているパターン」と「使用しなくてもいいのに、使用しているパターン」である。非省略の研究はまだ日が浅いだけでなく、後者のパターンについての研究は、ほとんど皆無である。よって本稿では、主題の非省略の研究について、特に「使用しなくてもいいのに、使用しているパターン」に注目したい。

また、多くの先行研究では、小説を分析資料として使うことがほとんどであった。小説は、作家の手法・文体的要因など複雑な作者のフィルターをかいくぐる必要があり、小説を主題研究の資料として扱うには問題があると筆者は考えている。よって、本稿では、アンケート調査と日本語母語話者が、新聞に投稿した文章を分析資料とする。新聞に掲載された読者投稿の作者は、作家ではなく一般市民のものであり、いわば素人の作品である。それゆえ逆に、プロが書く日本語よりも、より一般の日本語母語話者の日常感覚で書かれた日本語であると思われる。よって、主題研究の資料として、小説よりもよい材料であると筆者は考えたから、研究で使用することにした。

2. 資料分析

2.1 アンケート調査対象と調査資料

主題研究において、一般的な定説は、会話や文章において、話題が変わった場合または他の人物が登場した場合、主題が再提起されるとされている。寺倉(1986)、砂川(1990)、雨宮・林部(1993)。この点に関して筆者は、30人の日本語母語話者に対し、一つのアンケート調査をおこなった。その調査は、朝日新聞の読者投稿欄に掲載された読者投稿10編を使用して、日本人が、文例中に書かれている「私は」を省略すべきか否かを質問したものである¹⁾。その際に、文例中には「私は」が省略されていたものもあるが、そこをあえて「私は」を挿入し、日本語母語話者が文例を読み、「私は」の省略・非省略をどのように選択するか実験した。なお、調査期間は2004年10月23日～11月5日に行い、性別による内訳は、女性21名、男性9名の計30名であった。下の表1は、調査対象者を年齢別に表にしたものである。

表1 調査対象者の年齢別数

年齢	10代	20代	30代	40代	50代	60代	計
人数	2	2	15	7	2	2	30

2.2 調査結果

調査結果をまとめたのが表2である。表2の行と列は、それぞれ「選択肢番号」と「文例番号」である。文例番号は、全文例に付けた通し番号である。選択肢番号は、各文例中にある「私は」に付けた通し番号である(全文例を通した通し番号ではない)。ちなみに、表では①～⑧番まで欄があるが、それは文例【5】と【9】の選択肢が8個あったためであり、例えば、文例【1】のように6個しかなかった場合は、それ以降空欄とした。そし

て、表中の各数値は、被験者が、「私は」を「必要」と判断した数である。例えば文例【1】の①の数値は11であるが、これは被験者30人中11人が、文例【1】①の「私は」を「必要だ」と判断したことを意味している。なお、表の値には、「網掛け」と「網掛けでない」ものがある。前者は、アンケート調査に使った文例の原文（朝日新聞の読者投稿）に「私は」が元々あったことを、後者は、「私は」が省略されており、今回の調査の際に意図的に「私は」を付けた足したことを意味している。つまり、今回の調査では、網掛けの部分の数値が高く、網掛けしてない部分は数値が低くなることが予想された。では、表2を見ながら実験結果を考察していきたい。

表2 「必要」と答えた人の人数

選択肢番号 文例番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
【1】	11	7	17	2	3	8		
【2】	26	1	6	7	5			
【3】	23	6	19					
【4】	28	6	28	0	5	12		
【5】	12	4	26	8	12	13	21	6
【6】	30	11	4					
【7】	19	7	17	7	6	12		
【8】	26	18	22	1	4			
【9】	23	25	11	22	1	17	2	24
【10】	7	23						

まず網掛けの部分について見ていきたい。この数値は、原文に「私は」が元々あったものであり、被験者の多くが「必要だ」と選択すると予想される部分である。表2を見れば一目瞭然で、被験者の大多数が「必要だ」と選択した（例えば、【2】①、【3】①、【5】③など）。【2】①、【3】①、【5】③の例文は下の（1）～（3）であるが、例えば【2】①、【5】③は、被験者30人のうち86%の26人が「必要だ」と考えたわけである。

- (1) 1人で暮らす実家の母も運悪く足を骨折しており気がかりでしたが、私はすぐに治療をうけるため、翌日には帰らざるをえませんでした。
- (2) 我が家の正月は変わっている、と私は思っている。
- (3) ある日、私は肩を痛め、整形外科に行った。私が病院に入ると、父と同世代の方が大勢いた。

では、網掛けしていない部分を見てみよう。網掛けしてない部分は、原文には「私は」がなかったところをあえて書き加えて被験者に「私は」が必要かどうか選ばせているので、当然数値は低くなるはずである（例えば、【2】②、【4】⑤、【9】⑤など）。それぞれの例文は次の（4）～（6）であるが、いずれも調査結果では数値が非常に低い結果となり、特に【4】⑤においては、「私は」が「必要だ」と選んだ者は0人であった。つまり、原

文を書いた朝日新聞の読者も「私は」を省略すべきと選んだだけでなく、他の 30 人の日本語母語話者達も一様に「省略」を選択したのである。日本語母語話者間における省略非省略の感覚の完全なる一致である。

- (4) その間、私は友人たちが毎日のようにメールや電話で元気づけてくれたおかげで、無事に乗り切れました。
- (5) 私は目標を持ってケチな生活をする、心が貧しくならないように思う。
- (6) 入学間もない頃、私は「お母さんが学校に行くのイヤ？」と聞いた時も、今も、同じ質問にうなずく彼が、応援してくれるなんて。

しかし、表 2 をよく見れば分かる通り、原文と回答者間において、「私は」を省略するかどうかの判断が一致しているわけではない。例えば、【3】③(例(7))と【7】③(例(8))はいずれも網掛けであることから分かるように、原文に「私は」が元々存在していたわけであり、【2】①や【3】①の様に、回答者が「私は」を「必要だ」と判断すると予想され、【3】③と【7】③の数値も当然高くなるはずであった。しかし、それぞれ「必要だ」と判断した者は、それぞれ 19 人と 17 人しかいない。【2】①、【5】③の 86% に比して、【3】③が 63%、【7】③が 56% と格段に低い。

- (7) おせちも例年通り作らねばならず、私はまったく休養にならなかった。
- (8) さらに私は、並んで買うものという先入観もあった。

一方、【4】①③(例(10)と(11))、および【8】①(例(12))は、網掛けしていない部分であり、すなわち意図的に「私は」を付け足した部分である。故に、本来ならば、数値は低くなるはずであるが、実に 25 人を超える回答者が「必要だ」と判断した。さらに驚くべき点は、【6】①(例(9))である。【6】①では、すべての回答者が「必要だ」と判断している。何度も繰り返すが、網掛けでない部分は、日本人(朝日新聞に投稿した読者)が「私は」を不必要と考え省略して書いた部分であって、それを実験の目的の為に「私は」を付け足したのである。にもかかわらず、【6】①への回答は被験者全員が「必要」と選択した。大変興味深くまた奇妙な結果と言わざるを得ない。

- (9) 私は納得した。
- (10) 私は「細かいなあ」と言われることがある。
- (11) 私は無駄をなくし、モノの命をいとおしむケチでありたい。
- (12) 私はその手前から走ってきてその後、さらに遠い大田区の田園調布局まで行って来ました。

3. 話題の変換

以上の調査結果から、予想を外れる二つの興味深い結果が出た。一つは、「必要」と回答されるはずが、「省略」と判断されたこと、他方は、「省略」と回答されるはずが、「必要」と判断されたこと、である。「はじめに」でも述べたように、従来の研究では、主題の非省

略に関する研究が少なく、本稿はそうした主題研究を補完することを本稿の趣旨としている。ゆえに、ここでは後者について検討してみたい。すなわち、省略してもいいはずなのに、なぜ省略されなかったのかについて考えてみたい。今回のアンケート調査では意図的に復元させた「私は」における回答結果について、なぜ回答者は原文通りに「省略」を選ばなかったのだろうか。

前述した通り、主題研究において、一般的な定説は、会話や文章において、話題が変わった場合または他の人物が登場した場合、主題が再提起されるとされている。(寺倉(1986)、砂川(1990)、雨宮・林部(1993))。例えば、以下の例文を見てほしい。

- (13) 郷子はその日から一週間休暇をとっていた。将一は一度社に電話をいれ、そのことを知ったらしかった。その朝、臨海学校から真っ黒になって戻ってきた優の耳があるので、郷子は一言「絶対にいやです」と答えただけだった。

『砂川(1990:25)』

この(13)の例文では、「郷子」を主題とする文章の中に、「将一」という新たな主題が設定されている。また、話題もその場で変わっており、主題の再提起が必要であったため、再度、「郷子」が使用されたと解釈できる。

他方、朝日新聞の読者投稿欄に掲載された文中においても、主題が完全な話題変換の例も見られる。それが以下の文である。

- (14) 人事院は今、公務職場に能力・実績主義に基づく賃金・人事管理を導入しようとしています。確かに、公務にも税金や保険料の徴収など、数値化したその額を基準に評価する仕事があるかもしれません。それでも、成功例や失敗例を出し合うなど、チームワークは必要です。

一方、私は窓口で就職相談に当たっています。数値化で評価するなな、一人でも多くの人の相談に応じ、どんな仕事でも条件でもいいから、一人でも多く就職させることを念頭に置かざるを得ないでしょう。今は、利用者の立場で話を聞き、対応しています。

『朝日新聞』(2005/3/31)

この(14)では、一段落目の人事の話を終え、二段落目に入った際、「私は」が再提起されたのは、話題が転換したためであり、且つ視点も変わったために、新たに主題を提起する必要があったといえる。このように話題が完全に変換した時、主題の再提起が必要であることは、前述の主題研究の一般的解釈に合致するものである。

では、今回の調査結果を分析する際に、こうした定説で以って全てを説明できるのだろうか。もう一度表2に戻って、こうした主題研究の解釈を再度検討してみよう。

まず、【4】①と③は、「必要だ」と判断した者が25人以上もいた。【4】①と③は網掛けでないことから、原文に「私は」がなかったものである。すなわち、回答者は「省略」を選択すると予想される部分である。にもかかわらず、大多数の被験者が、なぜ「必要だ」と判断したのであろうか。まず、【文例4】を以下に示す。

(15) 【文例 4】

私は①「細かいなあ」と言われることがある。普段の生活は、質素につましくしている。節約は、一人ひとりができると思っている。

例えば、使わない電気を切り、ガスの種火は消しておく。まだ使えるものは捨てず、新しいものは買わない。私は②自分の体を使ってできるものは手作りする。

何かいただいたお返しは、ほとんど手作りの野菜、漬物、小物などにしている。私のケチの基本は、再利用することと、手作りということになる。

私は③お金を惜しむケチにはなりたくない。私は④無駄をなくし、モノの命をいとおしむケチでありたい。それと、ケチをするにも目標を持つことが大切である。

私は⑤目標を持ってケチな生活をする、心が貧しくならないように思う。私は⑥お金をためるために心が貧しく、卑しくなることだけは、まっぴらゴメンと思いつつ、日を送っている。

例文【4】①の「私は」が「必要だ」との回答が多かった理由は、おそらく、文頭として「新しい話題を導入」するためであろう。①の「私は」が、一段落目「自分の節約性格」から、次の「節約するために実行した実例」へ、そして文末まで繋がっている。つまり、「文頭」という性格上、話題の転換（正確には話題の導入）が必要であり、そのために「私は」が「必要だ」と回答者は感じたのではないかと推察される²⁾。

しかしながら、疑問に思われるのは、【4】③である。【4】③も網掛けではない、意図的に付け足した「私は」であって、「省略」を回答者が選ぶはずの部分であり、しかもさらに文頭ですらない。しかし、【4】③は28人が「必要だ」と回答している。これはどう説明すればいいのだろうか。

そもそも【4】は、テーマが「節約」で、基本的に「自分の節約生活」に関する事が書かれている。しかし、四段落目から、「若干」話題が転換しており、その転換に沿って、「私は」が使用されている。テーマが完全に転換したわけではないものの、自分の「普段の節約習慣」から、自分が「なぜ節約したか」へと話題が変換したことが、「私は」を挿入させた理由ではないだろうか。(16)を見てほしい。

(16)に示したように、一つの文章には、a、b、cの三つの部分が含まれる。文の全体は「節約」dというテーマに沿って述べられたものであるが、aの部分は、まず冒頭から自分の節約性格を述べ、そしてbの部分は、自分の普段の節約習慣と努力を述べ、最後cの部分は、なぜ節約したかの理由や目標を述べている。

このように、全体が節約という話であるが、文中ではaからbへ、そしてbからcへと話題の変換が見受けられる。ここではdの部分を「大トピック」と名づけ、a、b、c、の部分を「小トピック」と称しておく。

従来の研究では、話題が「完全に」変換する場合に主題が再提起されるとされた。つま

り、筆者の解釈から言えば、「大トピック」から「大トピック」への変換の際、主題が必ず使用される、と言える。しかしながら、実は「小トピック」から「小トピック」に移る場合においても、主題が使用されるのである。

この点について、別の文（『朝日新聞』2003年12月30日付）も使って考えてみたい。

(16)

私は①「細かいなあ」と言われることがある。

普段の生活は、質素につましくしている。

節約は、一人ひとりができると思っている。

例えば、使わない電気を切り、ガスの種火は消しておく。

まだ使えるものは捨てず、新しいものは買わない。

私は②自分の体を使ってできるものは手作りする。

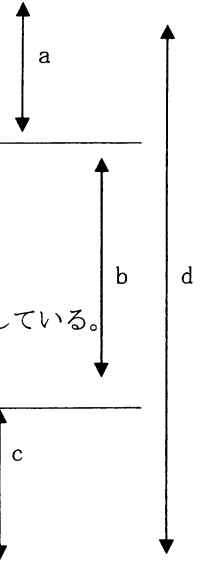
何かいただいたお返しは、ほとんど手作りの野菜、漬物、小物などにしている。

私のケチの基本は、再利用することと、手作りということになる。

私は③お金を惜しむケチにはなりたくない。

私は④無駄をなくし、モノの命をいとおしむケチでありたい。

それと、ケチをするにも目標を持つことが大切である。



(17) 私は、目だけはましだと思っていた。ところが、加齢とともに遠近二つの眼鏡を持つ羽目に。それもここにきて一段と進んだように感じて、以前一度だけお世話になったことのある隣町の眼科医院を訪ねた。

診察室に入ると、医師が「こんなん見つけました。朝日新聞です」と言って、カルテにクリップで留めた新聞の切り抜きを示してくださった。それは昨春、本欄に載った私の投稿「地元の食材で早春の気満喫」だった。私は大感激。以前に診ていただいた時、「花作り」のことを少しお話したが、あれから何年もたち、多くの患者さんに出会っておられるのに、私の名前を覚えていて拙文を見つけ、それを残していただくとは……。

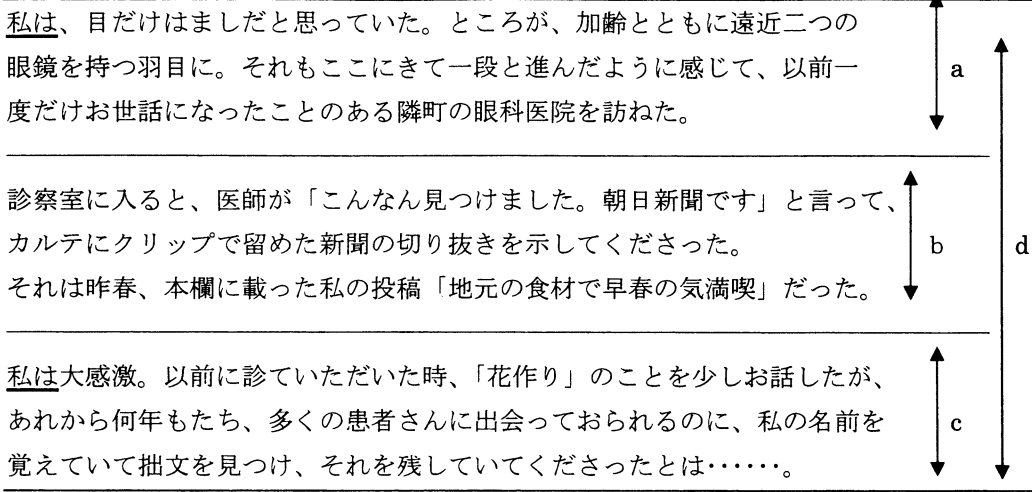
この例文(17)では、第一段落で、文頭に「私」が一度使用され、それ以外のセンテンスでの「私」は、省略されている。いわゆる三上(1960)の「ピリオド越え」である。別言すれば、一人称代名詞「私」が、「主題」として提示された事を意味しており、「文と文とをつなげる」という機能が働いたことを示す。

第二段落での「私」は、前半に新聞記事の説明が述べられ、後半に、自分の気持ちを述べようとした為に、再度「私」が提示された。これも、既存の研究成果の通り、人称代名

詞の機能が働いて、人称代名詞の省略が不可能になったといえる。

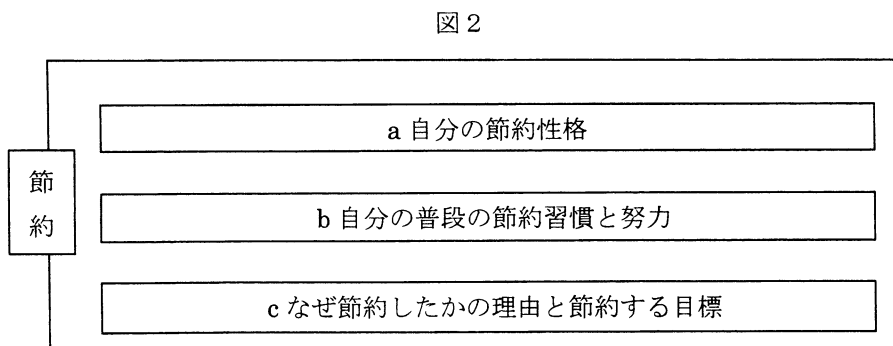
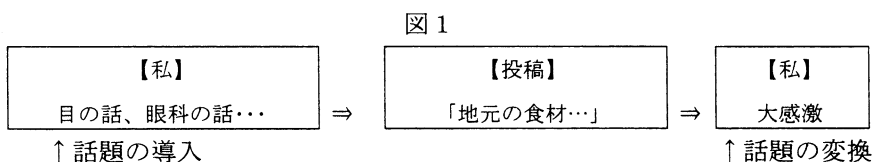
もう一度 (18) と (17) の例をみていると、(18) は (17) と違い、一つの文章の中に、関連した三つの「大トピック」が含まれる。a、b、c それぞれは、「目の話・眼科の話」、「地元の食材・新聞の投稿」、「自分の大感激の心境」である。

(18)



(18) と (17) を図式してみると、以下の図 1 と 2 となる。

図 1 では、完全な話題転換するのに対し、図 2 では、一つの「大トピック」の中に「小トピック」がある。2 つの図が違うパターンであるが、話題が完全に変換しなくても、主題（ここでは「私」）の再提起も可能である。



主題ととりたてて関係性のある助詞「は」の用法は、いわゆる「主題の提起」と「対比」の二つが機能している。

- (19) 私は15歳の時、福岡の両親の元を離れ、米国で暮らしている。両親の厳しい教育から逃げるのが目的だった。当てつけた非行に走ったこともある。そして、昨年9月、米国人の父と日本人の母の反対を押し切り、米陸軍に志願入隊した。

『朝日新聞』(2005/3/29)

- (20) 先日、老人会の昼食会で写真セールスがあり、思い切って女房と共に注文した。女房は指定日前に髪の設定に行った。着物は18歳の時、父母から買ってもらったお召しに定めた。朝鮮半島で生まれ育った彼女は、あの終戦時、苦難の道を不安な思いで引き揚げ、大事に持ち帰った品だけにひとしお思いが残るのであろう。

私は量販店で求めたスーツ。長男が香港勤務中に、家族で観光旅行した際に求めた記念のネクタイ。

『朝日新聞』(2005/3/29)

(19) と (20) は典型的な主題提起の「私は」と対比の「私は」の例である。(19) では、一つ新しい話題の冒頭に、「私は」の提起によって、後行文の主題の省略することが可能になった。これは三上(1960)の「ハのピリオド越え」にも呼応しているであろう。もう一つ(20)では、第二段落の「私は」は、第一段落の女房とはっきりと対照していることが分かる。対比のニュアンスが濃く、しかも、(20)の「私は」を省略すると、文の全体的に伝えたい趣旨が分からなくなってしまうため、ここでの「私は」は必ず省略してはいけないのである。

また、雨宮・林部(1993)によると、日本語の主語省略文の多くは主題展開文であり、非省略文の多くは主題導入文であるという。日本語において主題は、通常、文の要素としては表現されず、省略されるのが自然であることは周知の通りである。だからこそ、あえて主題を明示することは、文に含みを持たせることになる(例え含みがなくても、受け手にはそうとられかねない)。ゆえに、主題が変更される場合は、ほとんど省略文は用いられない。

では、「対比」と「主題提起」ではない場合に使用される主題の非省略を一体どう解釈すればいいのであろう。砂川(1990:23)は、日本語における復元が可能な主題は、省略が可能であり、そうした復元可能な主題の場合、その主題を省略するかしないかは、あくまで書き手の自由な選択に委ねられているというのである。つまり、書き手の勝手な選択によって、主題は顕現されるというのである。

しかし、本稿で考察してきた事を鑑みれば、砂川(1990)の意見に賛同するが、書き手の勝手な選択以外、他の要素もあると思う。書き手側の勝手な選択より、書き手の表現意図が主題の非省略することによって、書き手の繊細な心境の転換があるからこそ、書き手は主題を省略せず使用するのであって、それを受けて(読者)が、書き手の繊細な心境の変化を察するのである。

4. まとめと今後の課題

本稿は、「私は」の非省略を語用論の視点から、主題の位置にある「私は」の省略・非省略について検討した。本稿で、明らかになったことは、話題が完全に変換していなくても、「私は」が挿入可能、と日本人が判断しているということである。本稿では、「完全」な話題変換を「大トピック」から「大トピック」への移転と解釈し、そうした「完全」な話題転換において、主題の再提起を認めつつも、「大トピック」の中にある「小トピック」の階層レベルにおいても、話題の移動があれば主題が再提起されることを突き止めた。

また、表2では予想通りになってない他の太字の数字もあるので、その理由を探るのに、今後は、文の性質や人称と深く関わるモダリティなども考慮に入れ、多面的に分析をしていきたい。

注

- 1) 質問紙の内容については、拙稿(2005)、「日本語における主題の省略・非省略について—人称代名詞をめぐって—」『国際協力研究誌11(1)』を参照。
- 2) 例文【8】①と例文【9】①でも同様な現象が発見された。
例文【8】①:「自転車でならどこまでも、私は①郵便局巡りをしていますが、東京という所は何と郵便局の多い所だろうと感心してしまいます」。
例文【9】①:「私は①昨年4月、短大の看護学科に入学した。専業主婦だった私が外へ出ることで、生活は一変した」
いずれも文章の冒頭であり、新しい話題を導入するため主題が必要とされた。

出典

朝日新聞

参考文献

- 雨宮朋子・林部英雄(1993)「日本語における“談話主題”の省略に関する実験的研究」『横浜国立大学教育紀要』33、265-280
- 甲斐ますみ(1995)「省略のメカニズム—談話の構造と関連性および聞き手の推論を中心に—」『岡山留学生センター紀要』3、1-18
- 神崎高明(1994)『日英語代名詞の研究』、研究者出版
- 砂川有里子(1990)「主題の省略と非省略」『文芸言語研究 言語篇』18、筑波大学文芸・言語学系、15-34
- 曾儀テイ(2005)「日本語における主題の省略・非省略について— 一人称代名詞をめぐって—」『国際協力研究誌』11(1) 175-193
- 寺倉弘子(1986)「談話における主題の省略について」『言語』15(2)、99-105
- 三上章(1960)『象は鼻が長い』、くろしお出版